

心から楽しむ。そして

# 次の創造へ。

何かを創りたい……そんな熱い思いが心から発せられたとき、

人は、それを実現するための努力を、心から楽しむことができます。

未知なる新たな文化を生み出すのは、

そんな楽しさを知る人々の、熱いエネルギーです。

長沼の初秋は、町全体が祭りの雰囲気包まれる。長沼まつり——色とりどりのねぶたとねぶたを繰り出し、今では二万人の人数で湧き返る「秋の風物詩」は、ひよんなきつかけから生まれたものだった。

昭和六十年。町に青年団体連絡協議会が結成され、「若い力で何ができるか」と模索し企画された一つが、長沼まつりである。しかし、なにしろ初めての事で何もない。町内若組の子供みこし、踊り流しの協力と、須賀川市のある町内会より譲り受けたねぶたが一基。これが最初の長沼まつりであった。「あの頃は、まちでいろんなことをやってみようという動きが盛んだったんです」と、長沼まつりに関わるメンバーは、当時を振り返る。

譲り受けた一基のねぶた、子供の樽みこし、踊り流し……いろんなものを盛り込んで、その中にねぶたがある、という形での最初の祭

りが終わったとき、「もつといいものを創ろう」そんな機運が高まった。もつと「光り物」のねぶたを増やして華やかにしよう、もつとハネト（跳人＝踊り手）を増やそう、という声があがったのである。

しかし、そもそも「ねぶた」というものがどういうものなのか、誰もわからない。そこで「勉強しよう」と、青森まで足をのばした。ネプタ小屋で、実際に作り方を教わった。毎年毎年通い続けた。「そこで技術や材料を提供してもらったのは、大きかったですね」と、

メンバーの一人は語る。そうするうちに、町内のあちこちから「自分たちも一基出そうか」「俺たちもつくってみようか」という声があがり、ねぶたの数は年々増えていった。

まちが一つになる。祭り当日のわずかな時間のために、長い期間の準備を重ねる。そして祭りの日、ひとときの爽快感を味わう。それが素晴らしいのだと、メンバーは口を揃える。現代の祭りは「つくる側」と「見る側」は別なのが普通だ、という風潮がある。長沼もその例外ではなかったが、それがこのねぶ



ふだんの生活の中でも「これは祭りに利用できるんじゃないか」とアンテナを張っているんですよ。

特集

【教育、文化の育成】